

表千家家元
献茶式
茶会記

家元初釜

甲辰の新春を迎えて、表千家家元の初釜は、一月十日より十四日まで執り行われた（口絵カラー5〜9頁参照）。

濃茶席では、残月亭と九畳敷をとおした大広間において、猶有斎宗匠のお点前で濃茶が点てられ、三木町宗匠が半束をつとめられた。厳肅な雰囲気の中、列座された方々は順に濃茶をいただかれた。薄茶席は松風楼に設けられた。来菴された方々は、濃茶・薄茶をいただかれたあと新席へ案内され、縁高料理と雑煮で年酒を酌み交わし新年を祝われた。また最後に恒例の福引があり、猶有斎宗匠筆一行、大扇子、お好みの帛紗が当たり、お席は幸運な方の明るい歓声にあふれた。

初釜の期間には、裏千家今日庵・千宗室



家元表門

氏、武者小路千家官休庵・千宗守氏のほか、文化庁長官、京都府知事、京都市長、地元選出の国会議員をはじめ、政官財界の方々、大徳寺ほか寺院の僧侶方、神社の宮司方、表千家同門会の支部長、名誉会員などの方々が来菴された。

■寄付

千支大扇子
前二 箱書付並べ

福寿草置物（松風楼）



龍置物 伏見人形（回廊）

■残月亭

掛物 少庵召出状
前二 カツラ盆ニカウネンキ
書院ニ 鷹ヶ峰塗鶴竹堆朱硯箱
料紙シキテ



家元初釜 濃茶席

■九畳敷

掛物 元伯筆二行 春入千林處々鶯
花入 青竹尺八
花 結柳、曙椿
釜 利休好龍 了保作
炉縁 而妙斎好真塗柳蒔絵

元斎宗哲作

而妙斎好浅黄大高金砂子腰風炉先屏風

吉兵衛作

柱溜塗真台子

水指 染付 龍紋 善五郎造

杓立 而妙斎好南鐮紅梅文皆具ノ内

淨益作

火箸 龍玉頭 清右衛門作

建水、蓋置

而妙斎好南鐮紅梅文皆具ノ内

茶入 信楽大福

袋 荒磯緞子

茶碗 のんかう御紋

替 紀州徳川頼宣侯ヨリ江岑拝領

出帛紗 猶有斎好干支染 友湖作

茶杓 了々斎作 共筒 銘登り龍

薄茶器 即中斎好鳳凰蒔絵大棗

而妙斎好青漆朱網絵食籠 一閑作

菓子 常盤饅頭 虎屋製

茶 猶有斎好松韻の昔 一保堂詰

■松風楼

掛物 碎啄斎筆 福祿寿絵贊

前二 木地丸三宝 長髪斗 橙押え

琵琶台二 宝船置物 即全造

釜 霰線口丸 浄長作

炉縁 惺斎好真塗雪花蒔絵 宗哲作

金地銀切箔風炉先屏風 吉兵衛作

即中斎好糸目紹鷗棚 宗哲作



松風楼 飾りつけ

琵琶台二





袴付 掛物



寄付 飾りつけ

炉縁 而妙齋好真塗柳蒔絵 元齋宗哲作
而妙齋好浅黄大高風炉先屏風 吉兵衛作
即中齋好一閑朱入及台子
水指 染付龍紋 善五郎造
杓立 而妙齋好南鐙紅梅文皆具ノ内
淨益作
火簀 龍玉頭 清右衛門作
建水 而妙齋好南鐙紅梅文皆具ノ内

淨益作
蓋置 同右
茶入 信楽大福
袋 荒磯緞子
茶碗 のんかう御紋
紀州徳川頼宣侯ヨリ江岑拝領
替 吸江齋好小島台 旦入作
出帛紗 猶有齋好干支染 友湖作
茶杓 了々齋作 共筒 銘登り龍
薄茶器 即中齋好鳳凰蒔絵大棗
元齋宗哲作



東京初釜 濃茶席



薄茶席 床

而妙齋好一閑青漆朱網絵食籠
菓子 常盤饅頭 虎屋製
茶 猶有齋好松韻の昔 一保堂製
■薄茶席(広間)
掛物 仙厓和尚筆 雲龍画賛
脇釘二 即中齋好羽子板 青竹二
前二 長のし ミラノ製玉押え
独楽のし台二
花釘二 カリロク 友湖作
茶器 惺齋好一本柳大棗 尼宗哲作



家元初釜 薄茶席

水指 南鐙捻梅 淨益作
茶器 惺齋好一本柳大棗 尼宗哲作
茶碗 長入作 赤 串柿の絵
替 仁清写蓬萊の絵 保全造
茶杓 啐啄齋作 共筒 銘福寿草
了々齋箱
建水 寄竹形 正玄作
蓋置 鉄つくばね 淨心作
即中齋好一閑独楽繫干菓子盆
干菓子 笹餅煎、雲押物、千代結
亀屋伊織製



年酒席

茶 猶有齋好清友の白 柳桜園詰
■新 席
掛物 仙厓和尚筆 雲龍画賛
前二 即中齋好羽子板大小 鎌倉彫花台二
琵琶台二 惺入作 檜垣耳付花入
花 松、バラ
脇床二 覚々齋筆 詩歌巻物 鎌倉彫軸盆二
中の間壁床二 而妙齋好カリロク

家元東京初釜

京都での家元初釜に続いて、一月十七日から二十日まで、表千家東京稽古場にて初釜がめでたく執り行われた。

新型コロナウイルスとインフルエンザの感染予防が呼びかけられるなか、十分な対策が整えられ、濃茶席では一人一碗ずつ、続いて広間の酒飯席では縁高料理にて、年酒が酌み交わされた。その後、薄茶が点て出しでふるまわれた。恒例の福引も開催され、めでたい席に花を添えた。

■寄付
干支大扇子
前二 箱書付並べ
■袴付
掛物 惺齋筆 一花開天下春
■濃茶席(看雲亭)
掛物 元伯筆二行 春入千林処々鶯
前二 カウネンキ 妙全造
琵琶台二 桐木地鳳凰蒔絵硯箱
料紙シキテ
花入 青竹尺八
花 結柳、曙椿
釜 利休好龍 了保作